

概 要

このセッションでは、コリアン・ディアスポラと「国境を越える」現象とが論議された。

最初のユ・チョリンさんの「韓国済州島から見た在日コリアンの越境ネットワーク」は、「今日の済州島住民のほとんどが、日本に親戚がいる」という現象の指摘にはじまる。済州島住民の親戚はコリアン・ディアスポラとして、済州島住民が合法的、非合法的に越境し、日本で労働者として働く場所を確保してきた。彼らは国境をまたいだ生活圏を保持してきたのである。

つぎの李仁子さんの「越境女性たちの移住先での定着とジェンダー—元在日脱北者の日本暮らしを事例に」は、元在日コリアンで、一度、「北」へ帰り、そして「脱北」し、ふたたび日本へ戻った女性二人が、しだいに生活になじんでゆく過程を追うもの。親密な関係の中への回帰は、かえって葛藤を抱えること、似た経験の者どうしの交際が着地には役立つことを教えてくれる。

最後の、幅広い人類学研究のバック・グラウンドをもつ全京秀教授の「グローバル化の過程におけるコリアン・ディアスポラの分断」は、曾我ひとみさんという日本人「拉致被害者」の一家に対して、彼らをコリアン・ディアスポラという視角からとらえてみるとき、逆に「コリアン」も「ディアスポラ」も、範疇としての曖昧さが浮かびあがってくるという指摘にはじまる。そして、グローバル化現象が生み出す人びとの国境を越える流れに「民流」という言葉を与え、多くの事例をあげながら、コスモポリタンの生き方を将来に展望する内容である。

とりわけ最後の報告は、朝鮮半島が南北に分断されてきた現実の規定されてきた、これまでのコリアン・ディアスポラに対して、コスモポリタンとして生きる生き方への展望を示すものであり、ディアスポラとして生きるというアイデンティティの構築の戦略とは、対立せざるをえない。実際、高全教授と激しい議論になった。

近代的ナショナリズムの勃興の時代には、王侯貴族がインターナショナルな連携をみせ、あるいは、ブルジョワジーがインターナショナルな連携を見せるときには、貴族にコスモポリタニズムが生じた。祖国をもたないゆえにインターナショナルな連携をはかろうとした労働者階級の運動は、「労働者の祖国」を名乗ったソ連の解体過程にも、ある作用を及ぼししたと考えることもできる。ずっと国境を越えた生活圏を確保してきた済州島出身者たちの生き方は、まるで、今日の世界の構図の組み換えとは無関係のようであ

り、「北」から、ふたたび、日本のコリアン・ディアスポラ社会に再帰する女性たちは、その変動に突き動かされているようにも思える。そのどちらの面をも、日本のコリアン・ディアスポラ社会はもちあわせているということを、このセッションのふたりの女性研究者の報告は、よく示している。その二面は、かつてははっきりと、ふたつの分断されていたものである。

最後の報告は、その分断を超える提起であったが、地域的ネットワークへの帰属と、境界の構図の組み換えのなかで、その網の目を利用し、それをくぐりぬけつつ、生き抜くこととは、理論的には対立しても、実際の生活者にとっては、さほどのちがいはないのではないだろうか。今日の世界再編の激動は、その激動にもたえうるコリアン・ディアスポラ・ネットワークのたくましさを、逆にあぶりだしているようにも思える。

(鈴木貞美)